

しっかりと蒔かれた種

福音博物館の物語

フィクション短編

ケント・シスコ 作

ユウト

ユウトが最初に目を留めたのは、一本の木だった。

その木は最初の部屋の中央を貫くように伸びていた。幹は雨に濡れた杉の色をしており、朝の光を描いた天井の下に枝を広げている。木の周りを歩くと、若い男が幹にもたれている等身大の像に気づいた。ユウトより背が高く、あまりに本物らしいので、今にも動き出すのではないかと思った。

「何かに心を奪われているみたいだね」とユウトは言った。

姉のミオはスマートフォンから目を上げなかった。「本人に聞いてみれば？」

ユウトは聞こえなかったふりをして、展示に近づいた。作り物の木の根元では、細い流れが石の上を走っていた。水のせせらぎは聞こえるのに、隠されたポンプの音はしない。木の向こうの壁には、金色の空の下に庭が広がっていた。遠くに男と女が背を向けて立っている。

何を見ているのだろう、とユウトは思った。

そこで、二人が何も身につけていないことに気づいた。展示の説明には、人間が恐れも、不安も、悲しみも、死も知らなかったころ、神は御業を終えて休み、豊かな園に男と女を置かれた、とあった。人間が神とともに最初にしたことは、休むことだった。

「でも、どうして神様に休みが必要なの？」

父は館内地図を折り、上着のポケットに押し込んだ。「疲れたというより、仕事を終えたという意味だろう」

「どうしてこの人は木にもたれているの？」

「『休』という字がそう書かれているからだよ。左側が人、右側が木だ」

「じゃあ、わざと二つを一緒にしたんだね」

「そうだ。博物館が、わざと組み合わせたんだ」ダイチはもう一度展示を見ながら、誰にともなく言葉が続けた。「なかなか、うまい」

それは、何かを退けることはできないが、かといって本当かもしれないと認めたくもないときの、ダイチのいつもの答え方だった。

ユウトはこの部屋が気に入った。入ったときには、床の中央から伸びる木と、奥の明るい園に並んで立つ男女にすぐ目を奪われた。だが木を回り込むにつれ、その世界がどのように造られたかを示す色鮮やかな展示に視線が移った。

闇の中に光が生まれた。草木に満ちた大地の上に太陽と月が現れた。水には魚、空には鳥、地には動物が満ちた。最後に最初の男と女が再び現れ、そのあとに安息の日が来た。

ユウトは、入ったときに見た遠い二人へ目を戻した。なぜあれほど穏やかに見えたのか、今はわかった。欠けたものは何もなく、壊れたものも何もない。二人は創造主が自分たちのために造り、すべてを「非常に良い」とされた世界に生きていた。

ガラス床の下の甲虫も、描かれた枝のどこかから聞こえる鳥の声も、あるべき場所にぴたりと収まっているようだった。

ユウトは初めて、平安とは、ただ静かなことではないのかもしれないと思った。世界全体も、男も女も、神を見ることができるような状態だった。

母のユミは、後ろで説明文を一行残らず読んでいた。いつもなら試験でもあるかのように展示を読む人だが、今日は言葉を追う唇がかすかに動いていた。

ミオがため息をついた。「ここ、どれくらい時間がかかるの？」

「かかるだけだ」と父のダイチ。

「それ、時間じゃないし」ミオは退屈そうに言った。

「それなら、わからないままでも生きていけるだろう」

ミオは目をくりりとさせて園の壁へ向いた。しかし、本当には見ていないことをダイチは知っていた。親が選んだものなら検討する価値もない、と言わんばかりの、身についた退屈のしぐさを彼は嫌っていた。

ダイチとユミは二人の子どもに、話す前に聞くこと、まず人のことを考えること、自由とは好き勝手にすることではないと教えてきた。だが最近、その教えは遠くから運ばれてくる雑音のようにしかミオへ届いていないようだった。家の外には、服や注目度で互いを測る友人、あらゆる欲望を今すぐ満たすべきものに見せる画面、自制を弱さとみなす世界という、さらに大きな声があった。親に逆らうのも成長の一部だとはわかっている。それでも時おり、ダイチとユミが娘を呼び戻すより速く、世界が娘を奪っているように感じた。

ミオはスマートフォンをバッグにしまった。日曜なのに制服のカーディガンを着ていた。あとで駅の近くで二人の友人と会うのだ。ユウトはその二人が嫌いだった。一人は面白くもないことに大声で笑い、もう一人はユウトを見て、知的障害なのかとミオに尋ねた。

ミオは笑った。

けれど数日前、家の物置の裏でスズメバチに首や顔を刺され、ユウトが声を詰まらせたとき、それを聞きつけたのはミオだった。素手で蜂を払い、彼を家へ引き入れ、酢に浸した冷たい布を耳の下と首の後ろに当て、母を呼んだ。

腫れが引くまで、一日も一晩もそばにいた。初めは蜂の巣を調べるなんて馬鹿だと叱ったが、痛みに顔をしかめるユウトをずっと慰めた。

二人の関係がぎくしゃくしていても、姉は本当に自分を愛しているのだと、そのときユウトはわかった。

次の部屋の入口の上には、こう書かれていた。

「あなたは、どこにいるのか。」

「神様は、どこにいるかわからなかったの？」

今度は母が答えた。「わかっていたと思うわ」

「じゃあ、どうして聞いたの？」

母は、葉の影が壁の上で揺れる入口の向こうを見つめた。「隠れていることに、人間自身が気づく必要があったのかもしれないわね」

父が声を立てた。笑いのようでもあったが、そこに愉快さはなかった。

「都合のいい話だ。まず人間に、お前は罪人だと思わせる。それから治療薬を売る」

ユミは怒らず、ただひどく疲れた顔で彼を見た。「誰も私たちに切符を売っていないわ。入館は無料よ」

ユウトは思わず笑った。父さえ笑みを見せた。

そして四人は問いの下をくぐり、壊れた世界へ入った。

部屋の中央には同じ若者が、また一人で立っていた。ただし今度は、彼と木との間に壁があった。若者はうなだれ、見るからに悲しそうだった。

蛇のようなシューッという音が、左の壁へ彼らの注意を向けた。禁じられた木の枝に蛇が巻きついてゐる。録音された声が、蛇が女に投げかけた問いをささやいた。「神は、本当に言われたのですか……？」

蛇は、あなたがたは死なない、神のようになって善悪を知るようになる、と約束した。木の下で男と女は実へ手を伸ばした。

「ほかの木は全部あったのに、どうしてこれを食べたの？」

「欲しがってはいけないものを、欲しくなることがあるからよ」とユミ。

頭上の描かれた空が暗くなり、一つの問いが再び入口の上に現れた。

「あなたは、どこにいるのか。」

ユミ

ユミが初めてイエスについて歌ったのは、五歳のときだった。

先生の顔はもうほとんど思い出せない。覚えているのは、ピアノと、磨かれた床に差す陽光と、横浜のプロテスタント系幼稚園の窓に貼られた紙の花だった。「主われを愛す」。そのころは、その歌詞を不思議に思わなかった。「主われを愛す。主は強ければ、われ弱くとも、恐れはあらず……」。その先は記憶から消えていた。

幼稚園を出ると、イエスは遠のいていった。入学試験、音楽のレッスン、交際、大学、仕事、結婚、住宅ローン、子育て。葬儀では線香を手向けて頭を下げ、正月には皆と神社へ行った。時には祈ったが、誰に祈っているのか自分でもわからなかった。

ミオが幼いころ、ユミは自分が通ったような幼稚園を探したが、遠すぎた。教育に外国の宗教を混ぜるべきではないとダイチに言われ、反論しなかった。今でも、その決断を後悔している。

今、博物館の第二室では、園がいばらへ変わっていた。ねじれた醜いばらだった。木が物語の中で重要だとわかり始めたように、いばらにも役割があるのだと感じた。

道筋は、蛇の約束から最初の責任転嫁、そして最初の殺人へ続いた。ミオは無関心そうに肩を落とし、壁際を歩いていた。

ユミは「恥」についての展示の前で立ち止まった。

木々の間で恥じることなく立っていた男女が、今は葉の陰に身をかがめている。説明は、恥とは単なる気まずさではないと語っていた。「私は悪いことをした」という罪責の認識と、「私そのものが、間違っている」という恥の感覚とを対比していた。

ユミはその文を二度読んだ。目に涙がたまり、家族から素早く顔を背けた。記憶が押し寄せ、自ら命を絶とうとした日のことを繰り返し思い返した。あの日しようとしたことの醜さが、再び彼女を苦しめた。

それは、ほんの一年前だった。家族で上野動物園へ行く予定の日、ユミは具合が悪いふりをし、夫に子どもたちだけを連れて楽しんでくるよう説得した。心の奥で愛されていないと感じ、怒り、沈み込んでいた。積み重なったすべてへの仕返しを夫にしたかった。愛する子どもたちからさえ、自分の命を奪い去ろうとした。それだけが心の痛みを和らげる道だと、自分に言い聞かせていた。

彼らは惨めな家族ではなかった。それがかえって、ひび割れを言葉にすることを難しくした。ダイチは働いて家族を養い、毎夏、海へ連れて行った。ユミの好きな菓子を覚えていて、何でもない日に買ってきた。ミオは怖いと、今でも時々ユミの布団に潜り込んだ。昼間なら決して認めないだろうが。家族が言い争うと、急に静かになるユウトのことも思った。

家には愛があった。だが、隠し事と安らげない心もあった。その日に命を絶つつもりだったが、母から叔母が亡くなったと電話が入った。誰かと同じ日に死にたくなくて、別の日へ先延ばしにした。そのとき突然、あの問いが繰り返し聞こえた。

「あなたは、どこにいるのか。」

ユミは、部屋の中央に立つ花崗岩の壁を振り返った。壁の反対側では、若者のそばにこう書かれていた。「この壁があるのは、人が神を拒んだからです。」その表面には「壁・囲い」を表す漢字、「囲」があった。その光景はもの悲しく、なぜなのかと問わずにはいられなかった。「囲」の中に設けられた小窓には、もう一つの漢字「木」が入っていた。ユウトが駆け寄り、細い開口部から、壁の向こうで守られ、近づけなくなった命の木をのぞくのを、ユミは見ていた。

ユウトは、木が箱の中に閉じ込められていることに気づいた。漢字が目飛び込んできたのだ。

「『困』だ。困る、だね」と彼は言った。

ユウトは壁の反対側へ走り、何が書かれているか確かめた。こちら側には、「この壁があるからこそ、神はこれを贖われます」とあった。

彼が小窓をのぞくと、こちらからは同じ箱の中に「人」が見え、別の漢字が現れた。

「『囚』。囚人だ」と、ユミのそばへ来たダイチが言った。

壁は、人を木から隔てただけではなかった。不従順は人類を神から隔て、自由を求めた人々は、自ら選んだ世界の中で囚われ人になった。

「人間に見えるのは『困』だけ、神に見えるのは『囚』か。よくできてるな」ダイチは小声で言った。
。

よくできている、で済む話ではなかったが、ユミは黙っていた。

角を曲がると、暴力で膨れ上がった世界と、荒波に打たれる巨大な船が現れた。ユウトは走って、ドールハウスのように断面を見せた箱舟の模型を調べた。下層の小さな仕切りには、それぞれ一对の動物がいた。

洪水を過ぎると、博物館は約束の回廊になった。アブラハムの天幕の上には星々が輝き、雄羊はいばらの茂みに角を取られていた。ヨセフの色とりどりの衣は、穴と牢獄と王座のそばに掛けられていた。モーセは分かれた海の前で杖を上げ、ダビデは石投げを手に巨人へ立ち向かっていた。

「みんな、人を救うんだね」とユウト。

「正確には違う」とダイチは講義口調で言った。「ヨセフは飢饉から家族を救い、モーセは奴隷をエジプトから導き出し、ダビデは敵を倒す」物語を読んだことがあるようだった。

「じゃあ、みんな、神様がこういう人を送ってくれるのを待っていたの？」

ダイチは次のパネルを読んだ。「そういうことらしい」

壁には弓が据えられ、その脇の濃い木色の箎には一本の矢が収められていた。預言者の言葉は、口が鋭い剣のようであり、神によって研ぎ澄まされた矢とされ、箎の中に隠された僕について語っていた。

「矢」と「口」で「知」。それは、初めから男と女が求めていた知識と知恵そのものだった。将来のある時、明らかにされる隠された知識。

待ち望まれた救い主は神の言葉を語り、神の敵を打つはずだった。だが先へ進むほど、預言は奇妙になった。その僕は拒まれ、傷つけられ、砕かれ、他者の悪を負うという。神の知恵は人の知恵とは異なる。

「意味がわからない」とミオが言った。

展示について、あざけらずに口を開いたのは初めてだった。

「何が？」とユミ。

「みんなを救うために送られた人なら、どうして負けるの？」

ダイチは答えを噛み砕くように顎を動かした。「宗教は苦しみをありがたがる。失敗を立派に聞こえさせるんだ」

ユミは隠された矢を見た。「あるいは、本当の戦いが何なのか、私たちにはまだわかっていないのかもしれないわ」

ミオは目をくりりとさせた。だがその直前、迷いが顔をよぎったのをユミは見た。

回廊の先に夜空が開け、小さな家の上に星が輝いていた。近くの飼葉桶には布が置かれ、そばに「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」と、「信」の字があった。「信」は「人」と「言」から成る。展示は、神のことばとして知られるこの方が人となり、私たちの信仰の対象となられた、と説明していた。人。ことば。二つが一つになって、信頼し、信じるという字になる。誰の目にも明らかになるよう、そこに記されていた。

ユミの中に、四十年前の旋律が聞こえた。

主われを愛す。

幼いころ、その歌が本当は何を主張しているのか知らなかった。ただ、聖なる人が親切だったというだけではなかったのか。けれど今、人々が隠れたその神が、人々を捜しに来られたのだと気づいた。

喉が詰まった。

目を見られないよう、ユミは飼葉桶の展示へ身をかがめた。

ミオ

家族が自分をどう思っているか、ミオにはよくわかっていた。

母は、自分が遠ざかっていくと思っている。父は、規則でそれを止められると思っている。ユウトは、私の友達をローファーを履いた悪魔だと思っている。自分が「プライバシー」と呼ぶ世界を家族は欺きと呼び、「自由」と呼ぶものを危険と呼ぶ。

学校では、誰もミオを、今にも問題を起こしそうな子のように扱わなかった。アヤはミオを怖いもの知らずだと言い、サキは学校を面白くしてくれると言った。上級生の女子たちも彼女の名を知っていた。

誘い、秘密のアカウント、他校の男子、投稿前に慎重に切り取る写真。いつも次の一線があり、それを越えるたび、少なくともしばらくは、自分の人生は自分のものだという甘美な感覚があった。

演じている部分があることも知っていた。だが自分の行動を正当化した。誰だって演じている。父は立派な人を演じ、母は満ち足りた人を演じ、ユウトは何も気づかないふりをしている。

けれど博物館のイエスはミオをいら立たせた。なぜなら……彼だけは演じていないように見えたからだ。

病に冒された人に触れ、誰もが避ける女に語りかけ、詐欺師や裏切り者と食事をした。重んじられている男たちが子どもを追い払おうとしたとき、イエスは子どもを迎え入れた。ある映像では、一人の女が土の上に身を縮め、告発者たちは彼女を滅ぼす許可を待っていた。イエスは女のそばにかがみ、地面に何かを書いた。

ミオは物語を読んだ。何かが彼女の心をとらえ始めていたが、それが何なのか、うまく言い表せなかった。

次の展示では、羊飼いが九十九匹を残し、闇の中へ一匹を捜しに出ていた。続いて、すべてを使い果たした息子へ向かって走る父親がいた。

ミオは腕を組んだ。

「息子が帰ったのは、お腹がすいたからでしょ」彼女は声に出した。

ユウトが見上げた。「自分が悪かったって言ったよ」

「お金を使い果たしたあとでね」

「それでも、お父さんは走って迎えに行ったよ」

「ただのお話よ」

「だから『たとえ話』って書いてあるんだよ」

ミオは痛くない程度に、弟の後頭部を指ではじいた。「どうもありがとう、先生」

しかし、父親が走ったことはミオの心を乱した。大人は、自分に恥をかかせた子どものほうへ走ったりしない。愛情を引っ込め、説教をし、都合のよい時に過ちを一つ残らず思い出す。赦しても、赦しを借りのように感じさせる。

帰ってきた息子が父の衣に包まれている絵の前に立った。息子の顔は父の肩に埋もれ、彼を見つめる使用人たちは見えない。

こんな罪責と恥を抱えた最悪の瞬間に、すべてを知られ、それでも誰かが自分へ走って来てくれるとは、どんな感じだろう。

スマートフォンが震えた。アヤから、三つのアイスドリンクの写真と「先に始めてるよ」というメッセージが来ていた。続いて、「聖なるご家族に洗脳されないでね」と届いた。

ミオは「修道院に入ることにした」と打った。展示の場面から、いつもの自分へ引き戻されていた。だが文を消し、笑い顔だけを送った。やり取りを続けたくなかった。

家族は古代の通りを模した部屋へ入った。舟の近くに漁網が掛かり、ガラスの下で硬貨が光っている。ユウトがボタンを押すと、アニメーションの魚が口を開き、銀貨が現れた。

「どうしてこの話がここにあるの？」

ダイチはパネルを声に出して読んだ。「集金人が、イエスは神殿税を納めるのかと尋ねた。イエスはペテロに、『王たちは誰から税を取り立てるのか。自分の子どもたちからか、それともほかの者からか』と尋ねた。ペテロが『ほかの者からです』と答えると、イエスは、子どもたちは自由だと言われた。しかし彼らをつまづかせないため、ペテロに魚を釣り、その口から硬貨を取り出し、二人分を納めるよう命じられた」

ユウトは眉を寄せた。「じゃあ、イエス様は自由な御子で、税金を払う義務はないのに、それでも払うの？」

「そういう話らしい」

「しかも、ペテロの分まで？」ユウトは驚いた。

ミオは父の表情が変わるのを見た。ほんの一瞬、口元の筋肉が動きを止め、目が硬貨に釘づけになった。

その下には、こう書かれていた。

「自由な御子は、ご自分に支払う義務のないものを支払われた。」

さらに下の札には、「日本語の『お釣り』という言葉には、『釣る』という音があることをご存じですか」とあった。

ダイチは鼻を鳴らした。「何を狙っているかはわかる」

「ええ。でも、もう忘れないでしょうね」とユミはたしなめた。

古代の通りはエルサレムへ向かった。壁には、なつめやしの枝を振って祝う群衆が描かれている。その枝が動く影を落とし、音楽と歌声が聞こえた。人々はイエスを王として迎えていた。

次の部屋への入口左側には、なつめやしを表す「棗」が掲げられ、その形の中には、一つの「棘」の上にもう一つの「棘」があった。右側には同じ部分が上下ではなく左右に並び、「棘」という字を形づくっていた。

「博物館の初めのほうにあったいばらを覚えてる？ あれは、ここを指していたのよ」とユミはミオに言った。

広い部屋へ入ると、四人は立ち止まった。

頭上では、一人の男が裁きの座に着き、その下には別の男が黙ってうなだれて立っていた。

壁沿いのガラスケースには証拠が並んでいた。紫の衣、いばらで編まれた冠、鞭、さいころ、三本の鉄釘、金槌。その向こうに十字架が立っていた。

ミオの胸の内で何かが締めつけられた。描かれた奇跡なら昔話として片づけられる。だが、これらの物は違った。最後のケースの釘は、人差し指と中指を合わせたほどの太さがある。金槌がそれを打ち込むところを想像し、すぐに想像しなければよかったと思った。

ユウトへ振り向くと、これまで展示を見ていた興奮は消えていた。今は怯えている。

ミオは無意識に、蜂に刺された場所を避けながら弟の首の後ろへ手を置き、自分のほうへ引き寄せた。

このときだけは、ユウトも離れようとしなかった。

「この人は誰？」ようやくユウトが尋ねた。ひどく打たれ、顔が損なわれていたため、わからなかったのだ。

突然ミオは気づき、「イエス様だ」と言ってから、口を覆った。

ダイチ

ダイチは、納得しないつもりで博物館へ来た。

自分の罪を突きつけられる覚悟で来たのではなかった。

案内人はついて来ず、説教者が声を張り上げることもなかった。部屋はただ、一つずつ物を道に置いた。木、壁、洪水、硬貨、衣、鞭、裁きの座。だがどの物の下からも、同じ耐えがたい主張が聞こえた。あなたは負債を知っている。罪責を知っている。人が隠れる理由を知っている。

彼は知っていた。

十二年前、所属部門の業績が苦しかったころ、ダイチは完了していない仕事の請求書を承認した。初めは時期の問題にすぎないと自分に言い聞かせた。仕事はいずれ終わる。四半期を締めても、誰も損をしない。やがて仕入先が、取り決めを続ける見返りに金を差し出し、ダイチは受け取った。

金額は膨らんだ。疑問が持たれると、責任を部下へ押しつけた。若い管理職が職を失い、ダイチは残った。

金を受け取るのは何年も前にやめた。だが告白したことはない。会社は立ち直り、仕入先は合併で消え、証拠の書類は新しいシステムの下へ沈んだ。外から見れば、すべて終わっていた。

彼の内側では、今もずっと起こり続けていた。

その金の一部を、家の頭金に使った。ユミが玄関先の細い楓を気に入り、ミオが家の前の道で自転車を覚え、ユウトの背丈を鉛筆で記したその家は、裏切りの金で一部が買われていた。

告白すれば、家族が信じている自分を壊してしまう。したことを元に戻すこともできない。だから働いた。請求書は早めに払い、安全運転をし、ニュースの汚職を軽蔑した。自分の中で大きな不正が裁かれずに生きているから、小さな不正に厳しくなった。

魚の口には銀貨があった。何の義務もない自由な御子が、ご自分とほかの者のために支払ったと告げていた。

馬鹿げている、と彼は思った。

危険だ。

それなのに、なぜか美しい。

今、彼は家族と裁きの部屋に立っていた。

ピラトは淡い石造りの座で群衆を見下ろしていた。一方の説明には、人間の裁きは不安定で、自己保身に走り、金で買われやすいとある。反対側では預言者の言葉が、神の裁きを語っていた。賄賂の通じない真実。小さくもされず、忘れられもしない悪。

中央にイエスが立っていた。

「では、どちらなんだ？」ダイチは思ったより大きな声を出した。「赦しか、裁きか。何もかも簡単に赦しておいて、自分を正しい裁判官とは呼べないだろう」

ユミが彼を見た。「たぶん、それをこの部屋が説明しているのよ」

「罪のない男が拷問されたと説明している。そんなものは正義じゃない」ダイチは抗議した。

声が鋭くなり、ユウトが母へ近づいた。

それに気づいた自分を、ダイチは嫌悪した。

壁へ向いた。裁きを表す「裁」の四つの部分、十字架、衣、槍、傷が展示を囲み、この出来事を正確に描いていた。

近くには冠、金槌、釘、槍が置かれ、壁には十字架上のイエスが描かれていた。足元では兵士たちが衣を取り、分け合っている。別の兵士が槍でその脇腹を刺していた。

物語は、神が籐の中に矢を隠しておられたことを思い出させた。射手は神ご自身である。「射手」を意味する「弋人」が明るく壁に現れ、二つの部分がゆっくり位置を入れ替えると、「身代わり」を表す「代」になった。

誰もが、救い主、すなわち隠された矢を持つ射手が圧制者を打ち倒すと期待していた。新しいヨセフ、新しいモーセ、新しいダビデ、神の口、父の籐から放たれる矢になると。ところが、人類の敵を倒すはずの矢は、人類の身代わりとなった。天におられる創造主、まことの裁き主ご自身が、その裁きの座から降り、この裁きの座の前に立たれた。羊飼いが小羊となった。

「人の子は、多くの人の代わりに、ご自分のいのちを与えた。」

ダイチはもう一度読み、静かに言った。

「代わりに、か。負債を見逃すのではなく、支払う。悪を無害と呼ぶのではなく、その裁きを負う」

罪責は金を口座間で動かすように移せるものではない、と頭は反論した。だが彼の人生全体が、罪責の転嫁の上に築かれていた。

若い男がダイチの決断の結果を負った。ユミと子どもたちは、その代価を知らずに家を享受した。ダイチは責任を完全に別の人へ負わせた。

福音は、神が世界の罪をご自分の上に負われたと主張していた。

部屋の向こうには、園の二本の木が再現されていた。人類は、善悪の知識を、神なしでも所有し振るえるかのようにつかみ取った。ここで、その知識の頂点が歴史の中にさらされていた。十字架は悪の極みを示した。人間が、肉体を取って来られた神、神の御子を罪に定め、殺す。悪の知識。

同時に、善の頂点も示した。イエスが、ご自分を拒んだ人々のために進んでご自身をささげる。善の知識。

蛇が約束した知識は、ついに見えるものとなった。人が神になることによってではなく、神が人となり、人間が行った吐き気を催すような反逆を負うことによって。

ダイチは十字架の木を見上げた。下に集まる人々の視点から見れば、それは死の道具であり、巨大な悪だった。十字架を回り、ゆるやかに上る道から振り返ると、神の視点から見えるもの、下にいるすべての人へ注がれた神の愛が見えた。十字架のそばの人々は「人」、イエスが掛けられた十字架は「木」を表しているのだと気づき始めた。

ダイチは手のひらに十字を描き、数秒考えた。拷問と死の道具。その十字に人の形を描いた。突然、「木」と「休」の字が見えた。人々は、木である十字架上のイエスのそばに実際に立っており、壁はなくなっていた。不意を突かれ、どう反応すればよいかわからなかった。自分を押しとどめているのは罪責なのか。恥なのか。今、何が自分を妨げているのか。

「お父さん？」とユウト。

ほかの三人は先へ進んでいた。ダイチは両手をポケットに入れた。

「何だ？」気持ちを整えながら尋ねた。

「どうしてイエス様は、『完了した』と言ったの？」

ダイチは十字架を振り返った。「苦しみが終わったということかもしれない」問いを払いのけるように答えた。

戻って来たユミが、静かに説明を読み上げた。

「『完了した』という表現は、負債が全額支払われたときにも使われました。十字架上で、イエスは父から与えられた御業を完成されました。そこへ付け加えられるものは何也没有ありません。」

ユウトは考えた。「じゃあ、もし誰かが本当に悪いことをしても……」

「もういい」とダイチが言った。

その言葉が部屋を打った。

ユウトは目を伏せ、ユミは案内冊子を握り締めた。ミオは突然の敵意を込めて父を見た。

謝りたかった。だが、その代わりに次の部屋へ入った。

ほとんど真っ暗な部屋で、墓は石に塞がれていた。

何分もの間、何も起こらないように思えた。

ユウト

父の怒りが、あの質問そのものに向けられたのではないと、ユウトは知っていた。

子どもは知らないことになっている知識を、彼は持っていた。大人は自分を制御できることになっているが、しばしばそうではない。父との言い争いのあと、母が泣いていたことも知っている。父が帰宅しても、ときどき車の中で両手をハンドルに置いたまま、旅がまだ終わっていないかのように、内なる葛藤と闘っていることも知っていた。

墓の部屋で、四人は黙って待った。

闇は彼らの間の境界をぼかした。母の息遣いが聞こえた。ミオの手が肩に触れた。父は少し離れていたが、遠くはなかった。

やがて、石が石をこする音がした。

床に沿って光が差し込んだ。塞がれていた入口が開き、夜明けが壁いっぱいに広がった。空の墓の背後に麦畑が現れた。その上で、博物館が示す「蘇」の字の部分が一つずつ照らされた。草、魚、穀物。

死が最後に思えた場所に、いのちが現れる。イエスの教えの中で見てきたものが、今一つに組み合わせられ、「よみがえり」を表す漢字となった。

イエスは、天の神から与えられた人の体をもって、人類に道を示すと語られた。人の体は枯れる野の草のようだと教えた。大魚に飲み込まれ、三日後に岸へ吐き出された男の驚くべき話を、ご自分の埋葬になぞらえた。また、ご自分の死を、地に落ちる一粒の麦にたとえた。それが死ねば、多くの実を結ぶ。そして今、弟子たちは、神がイエスを死者の中からよみがえらせたと言った。

ユウトは父に叱られたことを忘れた。

「じゃあ、生き返ったの？」興奮して尋ねた。

「キリスト教徒はそう信じているのよ」とミオ。

「幽霊みたいなものじゃないよね？」念のため確認した。

「弟子たちと魚を食べ、友人たちが触れたと書いてあるわ」とユミ。

「じゃあ、死は勝てなかったんだ！」

誰も答えなかったが、部屋そのものが答えているようだった。隠されたスピーカーから朝の鳥の声がし、投影された風の中で麦が揺れた。

最後の展示室で、一行は人が木のそばに立つ場面へ戻った。

だが、以前と同じ園ではなかった。この木は光に満ちた都を流れる川のほとりに立ち、若者は木のそばで穏やかに立ち、ついに安らいでいた。「休」の字が再び現れ、その先の最後の部屋へ入った。床から天井まで届く何十もの旗に、それぞれ異なる漢字が記されていた。安息、神、罪、愛、裁き、義、恵み、よみがえり、信仰、そしてさらに多くのことをめぐり、初めから終わりまでの物語を語り直していた。

四人はそれぞれの仕方で立ち尽くし、見てきた物語に心を揺さぶられていた。日々使う漢字が小さな芸術作品のように、これらの出来事の重大さを思い起こさせていた。

最後の言葉は、彼らが見た物語は安息で始まり、その安息は失われたが、イエス・キリストの十字架によって、失われた者に安息が取り戻された、と語っていた。

「神は、私たちをご自身の安息へ迎えてくださいます。」

ユウトが声に出して読んだ。

母は素早く背を向け、出口へ歩いた。そこには物語の絵を印刷したカードと芳名帳を置いた小さなテーブルがあった。上の看板には、「ご質問を歓迎します。詳しく読む、または対話を希望する方はスキャンしてください」とあった。

「これについて話せる人がいればいいのに」とユミ。

ユウトは四角いコードと、その下の文字を指さした。「QRコードをご利用ください、だって」

ミオが軽い口調で言った。「先生のおかげで助かったわね」

今度は意地悪には聞こえなかった。

ユミはスマートフォンを取り出し、コードを読み取った。ダイチは黙って見ていた。

外の午後は、あまりにもいつもどおりだった。観光客は買い物袋を提げ、人の群れが通りの半分を塞いでいた。近くのどこかでコーヒーが焙煎されている。四人は駅へ歩き、数分間、誰も博物館について話さなかった。

それが何を意味するのか、ユウトにはわからなかった。終わってうれしいと思うべきなのか、それとも何かを学んだことを喜ぶべきなのか。蒔かれた種がこれからどうなるのか、まだわからなかった。

ユミ

三週間後、ユミは自分が癌であることを知った。

医師は、深い水の上へ道を架けるように、一文ずつ慎重に言葉を置いた。骨の癌。追加の画像検査。生検。調べる必要のあるリンパ節。病期が確定したあとの治療法。

ユミはうなずき、理にかなった質問をした。ダイチはすべてを書き留めた。エレベーターでは青いコートの女性が丁寧に微笑み、ユミも微笑み返した。

駐車場へ着いて初めて言った。「私、死ぬんだわ」

ダイチは書類の入ったフォルダーが曲がるほど握った。「そんなことを言うな」目に涙がたまっていた。

「いつかは起こることよ」

「今じゃない。まだ何も十分にはわかっていない」ダイチは言葉を詰まらせた。

ユミは彼を見た。顔が恐怖に歪んでいる。ダイチは彼女を抱きしめた。本当に抱きしめた。何年ぶりだろう。

家では、できる限り穏やかな言い方で子どもたちに伝えた。ユウトは声を上げて泣いた。ミオはまったく泣かなかった。抗癌剤で髪が抜けるのかと尋ね、そんなことを尋ねた自分を嫌悪した。ダイチは予約、保険書類、食事、送迎を整理し始めた。自分ではどうにもできない一つの事実に対し、仕事の壁を築いていた。

その夜、ユミは博物館のウェブサイトを再び開いた。

園と人間の墮落についての短い動画を見た。失われた息子へ走る父の物語を読んだ。ある女性が、キリスト教徒はイエスの復活を実際の歴史的出来事だと信じている、と説明するのを聞いた。死が世界へ入り、私たちが再び生きるために、イエスが死に勝利された。先祖供養は人を記憶の中によみがえらせるだけだが、イエスがなさるように永遠のいのちを与えるものではない、とその女性は説明した。

ページの下には、以前ユウトが示したフォームがあった。

「誰かとお話しになりたいですか。」

ユミは「そうしたいと思います」と打ち、消した。

もう一度打った。「夫と子どもたちと、軽井沢の博物館を訪れました。このたび癌と診断されました。幼稚園で歌ったイエス様の歌を覚えています。私はイエス様を知りません。でも、知りたいのです。今からでも始められますか。」

入力した文を読み返し、送信キーの上で指を止めた。そして押した。

翌朝、博物館で奉仕するケイコという女性から返事が来た。二日後、静かなカフェで会った。

「軽井沢から佐久まで、わざわざ来ていただかなくてもよかったのに」とユミ。

「直接お会いしたかったんです。あなたと一緒にいたくて」とケイコ。

ユミは泣かないように微笑んだ。

ケイコは公式を使って苦しみを説明しなかった。耳を傾け、小さな聖書を開いた。復活が来ることをご存じだったのに、友の墓のそばで涙を流されたイエスについて読んだ。

「わかっていたのなら、どうして泣いたのですか」とユミ。

「死は敵だからです」とケイコ。「希望を持つために、痛くないふりをする必要はありません」

診断されて以来初めて、ユミは隠れずに泣いた。

二人は二時間近く話した。最後にケイコは、祈ってもよいかと尋ねた。その祈りは特別な言葉を使わない、簡素なものだった。イエスをご自身をユミに知らせ、中村家全員を真理と憐れみのうちに支えてくださるよう願った。

ユミはハンドバッグにヨハネの福音書を入れて帰宅した。

恐れは消えてはいなかったが、ずっと小さくなっていた。以前の恐れは、出口のない部屋だった。今は扉がある。その向こうに何があるかは、まだ見えなかったけれど。

その夕方、ユウトは台所のテーブルで読んでいる母を見つけた。

「QRコード、使えた？」

ユミは微笑んだ。「ええ」

「質問、全部できた？」

「もっと質問があることがわかったわ」

ユウトは隣の椅子を引いた。「僕にも少しくれる？」

「質問を？」

「答えを」とユウトは笑った。

ユミは息子を引き寄せ、声に出して読み始めた。「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった……」

ミオ

ミオは一人で博物館へ戻った。

誰にも言わなかった。水曜日の放課後、アヤとサキだけを電車に乗せ、姿が見えなくなるまで待った。それからホームの反対側へ渡り、軽井沢行きに乗った。

入口のボランティアはミオを覚えていなかった。ほっとした。

園と洪水は足早に通り過ぎた。アブラハム、ヨセフ、モーセ、ダビデ、ヨナの前でも止まらなかった。闇の中を捜す羊飼いと、道を走って来る父のところへ、まっすぐ向かった。

母は死ぬかもしれない。

その一文が、あらゆるものに張りついていて、米を研ぐ母。タオルを畳む母。十時までに帰りなさいと言う母。そのどれもが最後の記憶になるかもしれず、平凡な思い出が耐えがたいものになった。

ミオは帰宅をさらに遅くすることで応じた。好きでもない男子とキスをし、望んでもいない写真を撮らせた。十分の間だけは、無謀さのほうが恐れより大きな音を立てたからだ。アヤに大げさだと言われると笑い、さらに突飛なことをした。

今、恥をさらした息子の絵の前で、自分が自由ではないことを理解した。あらゆる欲望、あらゆる評判、名づけることを拒んだあらゆる恐怖に引きずられていた。

「息子が帰ったのは、お腹がすいたから」と自分は言った。

空腹は、家のほうへ向き直る理由として、最悪のものではないのかもしれない。

父の言葉を読んだ。「この娘は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった。」

本当の展示には「息子」と書かれている。それは知っていた。けれど心の中で、その言葉が変わった。

十字架の部屋では、父が立った場所に立った。誰かが本当に悪いことをしたら、とユウトが尋ねたときの父の怒りを思い出した。父はユウトを黙らせたのだと思っていた。だが今は、一つの答えを黙らせようとしたのではないかと思った。

スマートフォンが二度震えた。電源を切った。

墓の部屋で、闇の間を待った。石が開いたとき、あまりに突然泣き出したので、口を覆った。

誰も彼女へ走っては来なかった。その必要はなかった。初めて、誰にも見られないことが憐れみのように感じられた。

帰る前に、テーブルから家族一人に一枚ずつ、四枚のカードを取った。帰りの電車でユウトのカードに書いた。「質問したあなたが正しかった。これからも質問して。」

母のカードには、「またケイコさんに会うなら、私も一緒に行く。」

父のカードには涙が一滴落ちた。そっと拭い、何も書かなかった。

自分のカードには、印刷された「あなたは、どこにいるのか」の下へ、こう書いた。

「イエス様、どうか私を見つけてください。」

ダイチ

ダイチは博物館へ戻らなかった。

博物館のほうで、彼のもとへ戻って来た。

病院の会計窓口で、支払うべき金を払うときに現れた。新聞の中に、聖書の出来事を描く漢字として現れた。ユミの診察ファイルの中に、「イエスは涙を流された」と書かれた折れ目のある紙を見つけたときにも現れた。台所でユウトが、復活を信じるかと母に尋ねたときにも現れた。

「信じたいわ」とユミは答えた。癌治療が体をひどく弱らせ、慎重に腰を下ろした。

妻が死ぬかもしれないという考えに腹を立て、ダイチは椅子を後ろへ押した。「そんな答えでは、人は闘うのをやめてしまう」

ユミはひるまず、その怒りを受け止めた。「いいえ。医者が勝てないと思っても、闘い続ける理由をくれるのよ」

ダイチは部屋を出た。

夜になると、魚の口の硬貨が見えた。何の義務もない神の御子が支払ってくださるという、なんと単純な絵だろう。

ダイチはずっと、キリスト教とは、自分も赦され得ると信じるよう人に求めるものだと思っていた。それだけでも十分に不可能だった。だが、まず自己弁護をやめるよう求めるものだとは理解していなかった。

若い管理職の破滅を「不運な業務上の結果」と言い張りながら、憐れみを受け取ることはできない。自分の罪を認めることを拒みながら、イエスを身代わりと呼ぶことはできない。

ある日曜の朝、ユミと子どもたちが小さな教会でケイコと会う支度をしていると、ダイチもコートを着た。

「あなたも来るの？」ユミは期待を込めた。

「いや」ぶっきらぼうに答えた。

彼女の顔からあまりに速く希望が消え、決心が揺らぎそうになった。

「行かなければならない場所があるんだ」と急いで付け加えた。

十二年前に職を失った男の家へ車を走らせた。

住所は数日前に調べてあった。車の中に二十三分座った。それから玄関へ歩き、呼び鈴を押した。

その会話が彼を贖ったわけではない。博物館の説明パネルのように進まなかった。田辺は信じられないという顔で彼を見つめ、やがて激怒した。ダイチを臆病者と呼んだ。解雇で結婚生活が傷つき、その業界での経歴も絶たれたと言った。返済を申し出ると、十二年を買い戻せる金額があるのかと問い詰めた。

「ありません」とダイチ。

初めて、言い訳をしなかった。

自分がしたことをすべて告白した。弁護士の名と署名済みの陳述書を渡した。田辺がそれを使うかどうかにかかわらず、会社へ話すと言った。赦しを求めなかった。

車へ戻ると、手がひどく震え、鍵をイグニッションへ差し込めなかった。

地位を失うかもしれない。法的な責任を問われるかもしれない。家を売らなければならないかもしれない。隠すことで守ってきたすべてが、傷つき得るものになった。

だが恐怖の下には、奇妙な、細く開けた場所があった。

「あなたは、どこにいるのか。」

ここです、と彼は思った。私はここにいます。助けてください。

その夕方、ユミに話した。

彼女が恐怖を示すと思っていた。そのとおりだった。怒るとも思っていた。それも、そのとおりだった。深く、澄んだ怒りだった。秘密が結婚生活に広げてきた混乱はなかった。ユミは田辺のため、子どもたちのため、ダイチが自分を知らせようとしなかった年月のために泣いた。

「どうして今なの？」

ダイチはほとんど声を出せなかった。「君が知らないままでいることに耐えられなかった」

ユミは身を引いた。

彼は顔を覆った。「君が希望によって変わるのを見て、自分には何もないとわかったからだ。博物館は、あの方がペテロの分まで支払ったと言った。それなのに私は十二年間、自分の分は自分で支払えると言いつけてきた」

ユミは長い間、向かいに座っていた。

「イエス様があなたを赦してくださると信じている？」ユミは「信じている」と答えてほしかった。

「赦すことがおできになるとは信じる」しばらく考えて答えた。

「私が聞いたのは、そういうことではないわ」

ダイチは釘と傷、裁きの下に立つ罪のない人を思い出した。自分の罪にも支払いが可能だという意味で、赦しを求めていた。キリストの十字架は、支払われたと宣言していた。だが、あの十字架でキリストが支払った代価を思うことは、ダイチには重すぎた。そして神の憐れみは、彼の想像をはるかに超えていた。

「信じたい」と彼は言った。

ユミは隣へ移った。すべて大丈夫だとは言わなかった。大丈夫ではなかった。それでも彼の手を取り、優しく握った。

「それなら、一緒にお願ひしましょう」ユミは彼の目を見て言った。



山には早く冬が来た。

ユミは手術を受け、その後に化学療法が続いた。髪は抜けた。ミオはスカーフを選ぶのを手伝い、ユミが疲れすぎて笑えないときには、わざと不格好に巻いて見せ、ついに笑わせた。ユウトはケイコと牧師に尋ねる質問をノートに書き留めた。その多くは、「もし神様がもう知っているなら、どうして……？」で始まった。ダイチは自分の行為を会社へ報告し、解雇される前に辞職して、長い償いの仕事を始めた。田辺は彼を赦さなかった。少なくとも、すぐには。

何一つ、楽にはならなかった。

けれど、隠れることは終わった。

ユミの最後の予定された点滴を翌日に控えた夕方、家族は居間で一緒に座っていた。大きな雪片が窓の外で舞っていた。いずれ売らなければならないかもしれない家は、もう彼らが必要としていた安心を与えるものではなかった。その空白を、はるかに大きなもの、信仰を必要とするものが満たし、彼らは神の御腕の中で安全だと知っていた。

四人はこたつを囲んでいた。ユウトは立ち上がり、台所から、今では家族のものとなった聖書を持って戻った。

ユミは聖書の終わりから読んだ。水晶のように澄んだ川、いのちの木、諸国の民を癒やす葉、神が人々とともに住まわれること、死も悲しみも痛みも過ぎ去ること。

「最後の部屋みたい」とミオ。

「そうね」とユミ。

ダイチは暗い窓を見た。窓枠に雪が積もり、その反射の中で、自分の顔が家族の間にあった。

ユミの治療がどんな結果になるか、まだわからない。告白が最終的に何を失わせるかもわからない。ミオに生まれた新しい柔らかさが昔の友人たちの皮肉に耐えるか、ユウトの質問が信仰へ育つかもわからない。かつて彼は、あらゆる危険を制御し、あらゆる勘定を隠せたときに、安息が来ると信じていた。

今は、なぜ決して安息を見つけられなかったのか、わかった。

ミオは、手術で痛む場所に気をつけながらユミにもたれた。ユウトも母へ寄った。ダイチは頭を垂れた。

その祈りは整ったものではなかった。

「イエス様」そう言って、もう一度始めなければならなかった。「イエス様、もし負債が本当に支払われたのなら、隠れるのをやめるよう教えてください。残された私の人生を受け取ってください。どうかユミを守ってください。子どもたちを祝福してください。そして……私たちを捜しに来てくださって、ありがとうございます」

天から声が答えることはなかった。雪は降り続けた。ユミの手が彼の手を見つけた。そしてダイチは、心と思いの中で、神を信頼し始めていた。

数か月前、彼らは、人が恥を知らずに安らぐ園へ入った。二本の木、禁じられた実、蛇の約束、そして安息を「困」と「囚」へ変えた壁を見た。いばら、洪水、約束、裁き、死、そして開かれた墓を通り抜けた。それぞれが、見過ごしてしまうほど小さな何かを持ち帰った。問い、歌、硬貨、走る父、転がされた石。

はるか昔、人類は善悪の知識へ手を伸ばした。中村家が博物館へ入る二千年前、その知識は十字架上で明らかにされた。人類の究極の悪——肉体を取られた神を殺すこと。そして、肉体を取られた神の究極の善——十字架上で人類のためにご自身を与えること。同じ一つの出来事が、同じ一本の木の上で、その両方を示した。拒まれた同じイエスが、壁を通る道を開き、囚われ人を自由にされた。

しばらくの間、何も起こらないように見えた。

しかし、種が最初の働きをするのは、闇の中である。

外では雪の下で、大地が静かに春を抱いていた。家の中では、中村家が生まれて初めて、安息を見いだしていた。